



TITLE:

先秦經濟思想史序説

AUTHOR(S):

穂積, 文雄

---

CITATION:

穂積, 文雄. 先秦經濟思想史序説. 經濟論叢 1941, 53(2): 147-162

ISSUE DATE:

1941-08

URL:

<https://doi.org/10.14989/131583>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 經濟論叢

號二第 卷三十五第

月八年六十和昭

## 論叢

勢力經濟學序説……………文學博士 高田 保馬

先秦經濟思想史序説……………經濟學士 穗 積 文 雄

支那銀行の畸形的推移……………經濟學士 德 永 清 行

## 研 究

ナチス勞働保護政策の原理……………經濟學士 中川 與之助

ベシユム景氣理論に於ける貯蓄と投資……………經濟學士 一 谷 藤 一 郎

價格安定政策の資本形成效果……………經濟學士 青 山 秀 夫

獨逸の廣域經濟論……………經濟學士 松 井 清

## 說 苑

北支の物價高に就いて……………經濟學士 穗 積 文 雄

## 附 錄

彙 報

外國雜誌論題

# 先秦經濟思想史序說

穗 積 文 雄

## 一 先秦經濟思想史の意義

經濟思想は經濟現象を内容とする思想であると言はれる。然らば經濟現象とは如何なるものであらうか。普通には經濟現象なるものが初よりそれ自身として存在するか、の如く説かれてゐるようである。例へば人が欲望充足の爲に外界の有體物を獲得する行爲が經濟行爲で、經濟行爲の上に展開する事象が經濟現象であると言ふが如くである。今かくの如き見方からすれば物の賣買の如きは典型的な經濟現象でなければならぬであらう。然しそれはその本質に於て眺むれば、畢竟、貨幣と物との交流に外ならぬ。そしてそれは同時に法律現象であり、倫理現象であり、はたまた藝術現象でもある。例へば有名な人肉賣買に於てシャイロツクがアントニオの胸肉の一片を求むる場面が名優人神の技によりて演ぜられる時それは藝術現象であり、その大詰に於て肉の一片を截り取ることは許すも血の一滴も流すを許さずとする判決に流石のシャイロツクが參るところで、世の善良なる母がその子への勸善懲惡の具に供するならば、それはすでに一の倫理現象であると言ふべく、さらにこの判決に對して碩學イエーリング (Rudolf von Jhering) がその『權利闘争論』(Der Kampf ums Recht) に於て人肉の一塊を截り取ることの許容は若干の血液の流

出を容認すべきが故に、人肉截取を許して流血を禁ずるは卑むべき遁辭、憐むべき詭辯である、判官は人肉賣買が良俗に反するの故を以てその無効を宣すべきであつた、と論評する時、それは一の法律現象でなければならぬ。そうすると經濟現象なる特別のものが始めよりそれ自身として存在してゐるとは考へられぬことになる。

思ふに、始より存在するものは何等の意味規定の無い謂はば混沌たるあるもの、かりに名づければ單に存在又は現象以前とでも言ふべきものに過ぎぬのであつて、たゞ吾々が何等かの立場の上に立つてこれに對する時そこに始めて一定の意味規定が生じ、或る現象が成立する。今、野に咲く一本の花を例にとつてみる。神の兒これを指して天國の福音を迷へる羊に説く時、それは神の啓示者であり、宗教的存在である。畫家これを寫して五彩の筆管をカンバスに振ふ時、それは美の顯現者であり、藝術的存在である。學者がこれをとりにて以てその構造を究むる時、それは科學的存在であり、可憐な花賣り娘がこれを鬻いで以て一家の生計を助ける時はそれは後に明なる如く經濟的存在となる。しかも野に咲く一本の花は野に咲く一本の花であつてそれ以上の何物でもなくそれ以下の何物でもない。従てその意味その規定これを花に問ふとも花は笑ふのみにて答ふところを知らぬであらう。たゞ吾々がこれに對する立場に應じてそこに何等かの意味規定が生じ、そこに一定の現象が成立するのみである。それで經濟現象ももとそれ自身として始より存在するものではなくて、吾々が存在をある特定の立場に於て把握するところに成り立つものに外ならぬとせねばならぬ。然らば如何なる立場に於て存在を把握する時そこに經濟現象が成り立つであらうか。

その立場に於て存在を把握する時單なる存在が經濟現象となる、そのような立場は如何なるものであらうか。それはその立場に於て存在を把握する時吾々が普通に經濟現象と考へてゐるものを包括することができるもので

なければならず、そしてその包括の範圍が廣汎であればあるほどよりよくそのようなものとしての適格性を具有することになると言ふことができると思ふ。よく經濟現象とはかく／＼のものを意味すると自由勝手に濟現象經の概念を規定し、普通に經濟現象と考へられてゐるものがその内に包括せられぬ場合には、それは常識の世界ではそうであらうが科學の領域ではそうではないと簡単に片附けられるようであるが、それでよいのであらうか。吾々が普通に經濟現象と考へるところのものが先づあつて、それを説明する爲にこそ經濟現象の概念も形成せられるのであるのに、勝手に經濟現象の概念を創作して、それに適合せぬものは普通經濟現象と考へられてゐるのであつても、それは經濟現象ではないとするのはどんなものであらうか。それを科學の名に於て押し通そうとしても、そも／＼經濟學の如き經驗科學は常識の世界の事象を統一的に説明するところに成り立つものであるのに、その事象は常識の世界であるとして科學の名に於てその説明を拒否するのでは論理の倒錯であり、科學の冒瀆でなければならぬのではあるまいか。それは丁度、寢臺が小さくて身體に合はぬからと言つて、身體の方を寢臺に合ふように截斷するの愚と擇ぶところなきものと評するの外はないであらう。

それではその立場に於て存在を把握する時、普通に經濟現象と考へられるものが最もよく包括せられるようなそのような立場は如何なるものであらうか。私はそれを求めて人類の物質生活を得る。こゝに人類の物質生活とは物質の生産と消費の統一過程の謂であつて、この立場に於て存在を把握する時普通に經濟現象と考へられてゐるところのものが最もよく包括せられるように思はれる。最もよく包括せられると言ふことは量の問題に過ぎぬには相違ない。然かしながら最もよく包括する時は、それは經濟現象構成に於ける立場となり、こゝに量の差は質の差となると解することができよう。それでもこの立場に於て普通に經濟現象と考へられてゐるところのもの

が最もよく包括せられると言ふことは、もと／＼それが程度の差、量の問題であるから理論上は一々他のものと比較計算して實證せねばならぬわけであるが、それは實際上はその煩に堪へぬところである。それで暫らく、普通に最も經濟現象と考へられることに縁遠いと思はれるであらうところの例へば演劇すらもこの立場に於て把握してそこに一の經濟現象の成立を見ることができるとを示すことによりてそれに代へることゝしたい。演劇は普通に藝術の世界と考へられるようであるが、吾々の論理に従へば先づその以前に單なる存在であり、それを例へば美の立場に於て把握する時始めて藝術の世界が展けるのであつて、これを善の立場に於て把握すれば倫理の世界が現れ、これを正の立場に於て把握すれば法律の世界が見られることは先に引けるヴェニス商人の例によりて既に明なるところの如くであるが、今これをその關係者がそれより得る收入を以て生産者の生産物を購入し、これを消費してその生存を維持すると言ふ點即ちこゝに謂ふところの物質生活の立場より把握することもでき、そしてその場合そこには經濟現象が成り立つのを見ることができ、所謂興行なるものが即ちそれで、よく演劇に藝術性と興行性の深刻なる相剋が存し、藝術性が興行性に屈服すれば演劇は墮落に陥り、興行性が藝術性に盲従すれば演劇が立ち行かぬ悩みが生じうることが屢論ぜられるによりてもそれを知ることができよう。

經濟思想はこの經濟現象を内容とするところの思想である。そして思想は思想家の思惟の産果である。勿論ある現象が存在を一定の立場に於て把握する時成り立つとする以上、現象は既に思惟過程を経過せるものであり、その限りに於てそれは既に思想の領域内にあるとせねばならぬとも言ひ得る。然かしそれ自身と、かゝる如きものを對象、内容とする思惟段階とは自ら別であり、從て吾々は暫らくこれを區別して、こゝに思想とはこの後の段階を指すことゝする。それは例へば、生産を價值の創造増殖とする限り、流通も消費も何れも價值の創造増殖

過程である故に生産に外ならぬにもかゝらず、吾々はその對物關係或は對自然關係に屬する面を特に生産と言ひ、その對人關係又は對人事關係に屬する面を流通と呼ぶが如くである。

思想は思想家の思惟の産果であると言ふことはやがて思想は存在から獨立しうるかの如き考へ方を招來し、更に思想が存在を決定するかの如き考へ方に展開する。デカルトの『吾思ふ故に吾在り』(cogito ergo sum)やカントの有名なる認識論上に於ける『コペルニカスの轉回』(kopernikanische Wendung)乃至はヘーゲルの『凡そ實在するものは理性的である』(Alles, was wirklich ist, ist vernünftig)と言へるが如きは何れもこの考へ方に通ずるものをつかの如くである。然しながらデカルトの『吾思ふ故に吾在り』は、吾思ふことが原因となつて、その結果として吾在ることが生ずると言ふのではなくして、吾思ふと言ふことは即ち思ふ主體たる吾の存在を要件とする故、吾思ふことを認むる以上吾在ることを認めねばならぬとするものであることはデカルト自身これを注意せるところであるので、従つてそれより直に思惟が存在を決定すると言ふことは出て來ぬ。又カントのコペルニカスの轉回は『物自體』(Ding an sich)を限界の外に残す。そしてヘーゲルの『凡そ存在するものは理性的である』に對しては、その流れを汲む、フオイエルバッツハは、『思惟は存在から出るが、存在は思惟から出ない』(Das Denken ist aus dem Sein, aber das Sein nicht aus dem Denken. — Vorläufige Thesen zur Reform der Philosophie, sämtliche Werke 2. B. S. 263)と斷じマルクスは『人の意識がその存在を決定するのではなくて反對にその社會的存在がその意識を決定する』(Es ist nicht das Bewusstsein der Menschen, das ihr Sein, sondern umgekehrt ihr gesellschaftliches Sein, das ihr Bewusstsein bestimmt. — Zur Kritik der politischen Ökonomie, Vorwort, p. LIV)と説きヘーゲルの論理を顛立してゐると笑ふ。然らば意識は存在によつて決定せられ、同一環境の下に於ては常に同一思想が生成するかと言へ

ば必しもそうとも限らぬようで、同一環境の下に於て相對立する思想の存することは稀らしいことではなく、從てそこにやはり思想家の個性の介入する餘地を認めなければならぬことになるのではないかと思はれる。それで思想は環境によつて制約せられることは認めるとしても、思想の主體の個性を無視するわけにもゆかないで、結局、思想は存在が思想家の個性を通じて發現するものとせねばならぬのであらう。勿論個性それ自身また存在の制約を受ける。然し、個性が存在の制約を受ける仕方は一樣ではない。そしてそれ故にこそそこに個性なるものが形成せられるわけである。但しここに存在と言ふ場合には思想そのものも亦包含せしめられることを忘れてはならぬ。だから環境は思想を制約するが思想はまた環境を制約することになる。然し或る思想が環境を如何に制約するかはその思想の理解の爲には必ずしも必要不可欠ではあるまい。何となれば或る思想が環境の產物である所以を明にせんとする場合、その環境が既に成立せる他の思想の產物である時、その思想は今問題としてゐる思想の説明の爲にこれを明にするを必要とすること勿論であるが、今問題とする思想が環境を如何に制約するかは今現に問題とする思想を明にする爲には必ずしも必要ではない。その思想はそれが環境を制約する以前に、從てそれが環境を制約することから獨立に既に成立してゐるのであるから、その理解にそれが環境を如何に制約するかを知ることが必要とせぬのは寧ろ自明の理と言ふべきであらう。然しだからと言つてそのことはそれらの思想が環境を如何に制約するかを無視してよいと言ふことを意味するものではない。それを究むることはもとより重要である。ただそれはその思想の内容を明にするのに不可欠ではないと言ふだけのことである。例へば孔子の思想が吾が徳川時代の環境を如何に制約したかば孔子の思想を理解する爲に必ずしも不可欠ではないが、さればと言つてそれが無意義であることはないばかりでなく、それは吾國徳川時代に於ける思想を知る爲には必要不可



缺であるが如くである。それで思想を理解することは單に思想をそれ自身に於て理解するだけでは足らぬのであつて、思想が存在が思想家の個性を通じて發現するものとして把握し、從て思想をその存在との關聯に於て見なければならぬ。そして存在の思想に於ける關係は先づ存在が思想家の個性を通じて自らを思想にまで發現せしむることに於て、次いでそのよつて以て自らを發現せしむべき個性そのものを制約することに於て二重である。だから思想を闡明する爲には先づその思想の成立する根源たる存在を明にし、次いで存在がよりて以て自らを發現するところの思想家の個性を究め、しかもその際存在が如何に思想家の個性を制約形成し、その個性が如何に存在を思想に迄發現せしむるかを明にせねばならぬこととなる。

それではかくの如き經濟思想は何時に始まるであらうかと言へば、それは人類とともに始まると言はねばならぬであらう。何ぜかなれば、人は生れて一日も物質生活を離れることができぬものであるから從て存在を物質生活の立場に於て把握することは恐らく人類とともに始まるとせねばならぬであらうし、また人は考ふる動物であるから思想も人類とともに始まるとせねばならぬことは寧ろ自明と言ふべきであらうからである。ち經濟思想が人類とともに始まらねばならぬことは寧ろ自明と言ふべきであらうからである。

かくて經濟思想は人類とともに始まる。然しながら人類の起原は悠久の昔に在る。故にこれが起原を追ひて遡り行けば遂に太古の霧の中に失はれる。それで經濟思想の最初のもは西洋に在りてはギリシアの昔に見出されたとせられることになるが、支那に於て吾々が始めてそれを見出すことができるのは實に先秦の時代に於てである。先秦時代とは秦以前の時代であるから、西曆紀元前二二一年秦の始皇帝による天下一統の以前の時代全體を意味し得るかの如くであるが、普通には東周時代を意味するに止る。だから歴史上の普通の稱呼によれば所謂春

秋戰國時代に互る。然しこの時代は秦を経て漢の統一國家への過渡期であり、從て思想史上より見るもこの時代の思想は前漢の頃に至つて大體大成するものゝ如く、普通先秦時代の思想として傳はるものの中には實際にはこの頃に成る部分が少くないようである。それで先秦經濟思想と言ふ場合その先秦は實質的にはこの頃までを含むことを許さねばならぬかと思ふ。

ところで支那經濟思想が先秦時代に始まるのは何故であらうか。普通には周の盛時、王道至美の治下に在つては財用贍りてまた何等の問題も起らず、從てそれに就いて考ふる必要が無かつたので經濟思想が特別に生ずる餘地もなかつたのであるが、周末王道漸く式微し、財政破綻を來たすに及んで遂に經濟思想が生れるに至ると説かれる。例へば歐陽修が唐書食貨志に於て、『古之善治其國而愛養斯民者。必立經常簡易之法。使上愛物以養其下。

下勉力以事其上。上足而下不困。……及暴君庸主縱其佚欲。……用於上者無節。而取於下者無限。民竭其力而不能供。由是上愈不足。而下愈困。則財利之說興。』と言つてゐるが如きはその典型的なものと云へよう。然しこの考へ方の根底には儒教に於ける堯舜三代の治を謳歌し過去を黃金時代として現在を堯季末世の時代とする社會墮落説の思想が存在してゐるが、事實は社會は次第に發達して來てゐるのであつて、後の時代は前の時代より進歩してゐると見るを禮當とせねばならぬであらう。かりにかくの如き社會墮落説をとるとすれば、末世は獨り先秦時代に限らずそれ以後現代に至る迄末世ならざるは無しでなければならず、從て經濟思想も亦ずつと華やかでなければならぬ筈であるが、實際はそうでなくて、先秦時代に於て經濟思想の華やかであるに引き換へてその後漢以降はそれ程でなく、人によりては支那の經濟思想は先秦時代に花と咲き先秦時代に花と散つたとさへ評する位である。少くとも支那經濟思想は先秦時代に百花の一時に發するが如く妍爛を極めたにもかかはらずその後はいか

て生じたるものが承繼せられるに過ぎぬと言つても甚しい言ひ過ぎにもならぬようである。それでみても支那經濟思想が先秦時代に始めて生成せることを以て末世の故に歸するの無理なることが知られると思ふ。それでは先秦時代に於て右の如く始めて經濟思想が見出され、しかもそれが前後を空うするほどに喚發せるは何故であらうか。

思ふに昔は地廣く人稀に、欲望は寡く生活は簡易であつたから、人々は容易に鼓腹擊壤できて、別に經濟のことに心勞する迄に至らなかつたのであるが、世の進むとともに人口増殖し、欲望増加し、従て亦社會機構複雑化するにつれて、漸く經濟の重壓が増大し、人々をしてこれに就いて考ふところ深からしむることとなり、そこに經濟思想が活潑なる發展を示すこととなる。そして支那に於ては晚周先秦時代が丁度その時期に當ると解すべきであらうか。勿論それは或はこの時代より以前に迄遡りはせぬかと考へられるかも知れぬ。然かし思想はもと無形であるから、それは何等かの記録を通じてうかがふの外はない。そしてその記録はこの時代から見ることをできると言ふことも考慮せねばならぬであらうが、またこの時代周室の勢威漸く衰へ世は春秋時代に入り、諸侯中原に覇を唱へ周室を挾んで天下に號令せんとして専ら富國強兵を計り、殊に戰國に入るや、諸侯各割據對立して兵馬倥傯、干戈止む時なく、富國の要益切で、ここに財利の説興らざるを得なかつたことが、やがて先秦時代の經濟思想をして見事なる花を咲かしめるに與つて力があつた所以と解すべく、少くともこの時代に至りて經濟思想が始めて明瞭に吾々の注意を引く迄に發展せる所以と解することができのではあるまいかと言ふことも記憶するの要があらう。然かしかく解するとするもやはり、兵馬倥傯は必ずしもこの時代に限らず後代に於ても例へば南北朝時代或は五代亂離の間等その例に乏しくないのに何故にこの時代のみ秀れたる經濟思想が花と咲い

たのであらうかと言ふ問題が残る。だが一口に兵馬倥傯と言つても、それは社會文運の推進力として作用する面とその破壊力として作用する面がある。そして幸にして先秦時代に於てはそれが社會文運の推進力として作用する面が有力であつたが、その他の場合に於ては概ねその破壊力として作用する面が有力であつたと解せられる。何故先秦時代に於ては推進力の働をしたのに後の時代に於てはその破壊力の働をしたかと言へば先秦時代に於ては中夏の文明社會が互に對立して均衡を維持せんとする状態であつたのに、後の場合は大抵野蠻社會による文明社會の侵凌蹂躪であつたによるとすべきであらうか。勿論この場合楚や秦はもと夷狄であつたには相違ないとしてもそれが五霸に加はる頃には既に華夷の別を立てることは無意義に近かつたのであり、又野蠻社會の文明社會への侵入は老衰社會に清新の氣を注入するもので結局に於て見れば社會の發展を招來するもの、少くとも社會を衰亡より救済するものであることを認めぬわけではないが、然しその場合文運が一時衰退することは否めぬところであらう。

それから先秦時代にあつては思想は自由にして諸子百家如何なる思想を吐露するも差支へなく、甲論乙駁思想界は未曾有の活氣を呈し、空前にして絶後の發展を見たのであるが前漢に入り武帝の世に思想を統一して儒教を以て國教に定めてよりは時に隆替なきに非ずとはいへ大體に於て儒教一色に塗りつぶされ思想の對立はあつても儒教の埒内を出でざる謂はば蝸牛角上の争に過ぎず、最早や先秦思想界の活氣を見るに由なきに至つたことをもあげねばならぬ。かくて經濟思想も先秦以後大なる發展を見ず、即ち先に引ける如く支那經濟思想史は先秦時代に始まり先秦時代に終るとさへ言はれるに至るのである。

先秦經濟思想を内容とする歴史は即ち先秦經濟思想史である。然らば歴史とは何であらうか。歴史とは何ぞ哉に

對する解答は私は普通に歴史と考へられてゐるものに就いてその本質をつかむことによりて得られねばならぬと思ふ。そしてそうすることによりて私は凡そ歴史とは事物を流轉の相に於て捉へ、その生成變遷を觀するものと言ふ解答に到達する。よく歴史は一回發生的事象を取り扱ふと言はれ、又は歴史は個別相の闡明を使命とすると言はれる。それはその通りに相違ない。然しそれは歴史が事物を流轉の相に於て捉へ、その生成變遷を觀するものであることより來る歸結に外ならぬ。だからそれと對蹠的な普遍性を追求して法則を樹立せんとする自然科学と雖亦これを流轉の相に於て捉へ、その生成變遷を觀することができ、そしてそこに自然科学史なるものが成り立つを知る。なほ、事物を流轉の相に於て捉へ、その生成變遷を觀すると言ふことはこれを具體化すれば正反合の所謂ダイアレクチックの過程に於て理解することになり、そしてこゝにダイアレクチックとは私は物とか心とかの内容を有せぬ、換言すれば無を内容とする一の論理組織でなければならぬと思ふのであるが、こゝにはその詳論の餘裕がないのでたゞ結論だけを述べるに止める。

それで先秦經濟思想史は即ち上來述べ來りたる先秦經濟思想を流轉の相に於て捉へ、その生成變遷を觀するものに外ならぬ。然しこゝに先秦經濟思想を流轉の相に於て捉へその生成變遷を觀すると言ふ場合二つの意義があることを忘れてはならぬ。それは先秦經濟思想をそれ自身を流轉の相に於て捉へ、その生成變遷に於て觀することであり、他は支那經濟思想を流轉の相に於て捉へ、その生成變遷に於て觀する過程に於て先秦經濟思想をしかく取り扱ふことである。なる程先秦經濟思想は支那經濟思想史の中に於て空前にして絶後の偉大なる役割を果してゐること上來屢々ふれた如くである。然しそれにもかゝらず、やはりそれは長い支那經濟思想史の中に於ける短い一齣に過ぎぬ。それで先秦經濟思想史の史たる所以はむしろこの後者の意義に於て重要性を持つものである。

とを認めなければならぬであらう。

以上私は先秦經濟思想史の意義をほゞ明にしたかと思ふが、然らばそれは如何にして可能であらうか。換言すれば先秦經濟思想史の方法は如何にあるべきであらうか。私はそれを節を改めて考へてみよう。

## 二 先秦經濟思想史の方法

支那經濟思想は先秦時代に於て始めて見出される。そしてそれは實に先秦諸子百家の論議に於てである。然し先秦諸子百家の眼目は政治、道德に在る。従て彼等は必ずしも經濟をそれ自身としては取り扱はぬ。それで經濟思想はそれに於てそのようなものとしてそれ自身に於て存在するを見出し難く、政治、道德の論議の中に埋没してゐるに過ぎぬこと、丁度西洋經濟思想に於てもその近世經濟學の成立以前に於てはさうであつたと變はるところはない。それで先秦經濟思想史の究明は、先づ諸子百家に就いて謂はゞ經濟思想の蘊脈とも稱すべきものを探求し、採掘し、精鍊しそして體系化する操作を爲すことに於て成り立つこととなる。だから今かりに某子の經濟思想はかく／＼であると當の本人を地下に立たせてこれを示しても、最初は彼自身もさう言ふものかと案外面食ふことが無いと言ふことは必ずしも保證の限りでないかも知れぬ。然しそれにもかゝはらずそれはやはりさうなのであつて、彼がそれを認知すべき筈であることは、彼に未見の實事ある場合にこれを認知すべき筈であることよりもその度合に於て劣るべきいはれを知らぬ。

ところでそれは如何になすべきであらうか。勿論諸子百家を無定見に探ぐるは氣の利かぬことおびたゞしい。それで時代順に見て行くのは或は最も無難であるかとも考へられる。何とたれば、それは、事象をその發展のま

ゝにその跡をたどるのであるからそれは極めて素朴ではあるが、自然であり、従て無理がないようであるからである。この方法の長所は『思想進化の跡が歴々として明白になると共に、各時代の背景、即ち政治の實狀及び社會の實狀が委細説明され、思想發生の動機を觀察し得る點に在』(梁啓超、先秦政治思想史、重松俊郎氏譯本二頁—二二頁)り、現にこゝに問題とする先秦經濟思想史それ自身一の時代的研究に外ならぬ。然かしその短所として『同一時代に關する資料が時に多過ぎて各問題に對する詳細な敘述を爲し難く、若し強ひて爲さんとすれば、動もすると前後重複矛盾し讀者をして嫌厭せしむる點、及び同一學派の學說でありながら、先輩と後輩とが年代間隔して、讀者をしてその系統の所在に迷はしむる點に在』(同上書、二二頁)と言はれるがそれは先秦諸子百家の究明に就いても言へるところである。のみならず諸子百家の中にはその経歴明かならず、その時代定かならざる者に於て必ずしもその先後を決定し難い場合あり、特に就いて以てその經濟思想をうかがふべきその論著に至りては亡佚傳はらず僅に他書に散見せるところよりして想定するの外なき場合あり、そしてこの場合に於てはそれが果して原來のまゝなるや或はその撰者乃至はその他の影響によりて歪曲せらるゝことなきやを決し難きことあるべく、又幸に論著の今に傳はるとせられるものに於ても、原來のまゝに於て傳はること寧ろ稀と言ふべく甚しきは全然後人の僞撰假託に出づる場合あり、或はそれ程ではなくとも一部後人の手になるが如きは珍らしとせざるところの如くである。さうしてみると時代順にみて行く方法必ずしも自然であるとも言へぬ。殊に諸子百家を時代順に一々見て行くはその煩に堪へぬ。その爲でもあらうか、普通には諸子百家を數箇の流派に分類整理して見て行く方法が採られてゐる。

この方法にも勿論缺陷は存する。例へば先づ儒家を述べ次に道家に及ぶ場合、孔子に次ぐ老子が荀子等儒家の

學者を敘してしまつてからでなければ論及し得ず、從て思想進化の過程に對する説明に困難を來す場合あり、又各學派の末流は相互の影響が極めて多いからこれを或る類型に入れることは正確には不可能事に屬すべく、さらに數箇の大學派以外の獨立の思想にして勢力比較的微弱なるものは往々漏略され勝ちであると言ふが如きがそれとして指摘され得よう。(梁氏前掲書、二二頁—二三頁)然しこの方法は數々の優れたる點を有つ。先づ諸子百家を數箇の流派に於て觀察することは簡明であり、次には先に述べた假託、僞撰の如きも、結局それらは同一學派に屬するものと考へられ、從てその諸子の思想とするは不可なりとするも、その學派に屬するその書物に見はれたる思想としてはみることができ、そしてさうすることによりてそれが、その流派の思想として取り扱はれることは當然許さるべく、そしてそれはその流派を説明するのには差支へはないことになり、又諸子の時代の前後の不明の點ある場合も流派の中に包含してしまへばその不便もそれだけ緩和せられることになるであらうからである。

それでは先秦諸子百家は如何なる流派に分類せられるであらうか。諸子百家の分類に就いては吾々は司馬談の六家要指、劉向の七略に於ける諸子略をあげることができるが、それでも劉向の七略に基き前漢書藝文志に於て班固がこれを十家者流に分類したものが最著名のようである。そしてそれは次の如くである。一、儒家者流、二、道家者流、三、陰陽家者流、四、法家者流、五、名家者流、六、墨家者流、七、從橫家者流、八、農家者流、九、雜家者流、十、小說家者流。そして班固によれば右十家者流は何れもその淵源を周官に發することとすること次に引く如くである。曰く、一、儒家者流。蓋出於司徒之官。二、道家者流。蓋出於史官。三、陰陽家者流。蓋出於羲和之官。四、法家者流。蓋出於理官。五、名家者流。蓋出於禮官。六、墨家者流。蓋出於清廟。七、從橫家者流。蓋出於議官。八、雜家者流。蓋出於議官。九、農家者流。蓋出於農稷之官。十、小說家者流。蓋出於稗官。そし



て支那に於ける學問知識の始は周代世襲官たる職務の家に傳はる職務のそれであつたが、周末列國の爭覇攻伐により、亡國の職務の家がその官守を失へる結果、彼等の學問知識は一家のそれとなり、一般に解放せられることになり、この學問を受けた者は即ち士の階級で、進んでは諸侯に政治を説き、或は實際政治にたづさはり、退いては書を著し、人を教へたもので、諸子百家の説はかくて興るとせられる。さうすれば周末の十流が盛周の官より出たとする説が肯定せられぬこともないようであり、道家が史官に出たと言ふのは、老子が周室の史官であつたと言ふ史記の記述と一致し、又墨家が清廟の官より出たと言ふのも墨子が郊廟の禮に通じたる史角に學んだと言ふ呂氏春秋の文に符合せることはまたこれを裡書せるものゝ如くではあるが、然し十家者流はもと時を同うして興つたものではなく、各々時代の推移につれて現はれたるもので凡てが周官より出たとは考へ難いとも言はれる。それで果して班固の言ふが如く十流周官に出づるやにはかに決し難いとせねばならぬ。

それはともかく班固はかく諸子百家を十家者流に分かつが、然しことわるまでもなく、これらの學派は後の學者が便宜の爲に分類せるもので仔細にみれば各人それ／＼その特徴を有することその面貌を異にする如く十人十色であるとも言へる。がまたそれとともに、この十家者流の中最も古く起りたるものは儒道二家で、その他の流派はこの二大學派より出でたる分派に過ぎぬとし、陰陽家、墨家、名家は儒家の支裔で、法家、從橫家、農家は道家に近く、雜家は名詮自稱雜家であるが、しかもその中心思想の歸するところは儒に非れば道であるとも説かれる。それで結局大切なことは眞に學派として他と區別するに足る特徴を有し、從て區別することができるともに、それが必要であるか又は便利であるか、換言すれば、區別する價值があるかどうかと言ふことである。さう言ふ立場から見ると、大體儒道墨法の四家は少くともその價值を具有するとしてよいようである。そして以上

は先秦諸子を一般思想の觀點より分類する場合であるが、今經濟思想の觀點よりするもそれに異議を申し立つべき理由はないように思はれる。

かくて先秦經濟思想を儒道墨法四家者流に就いてうかがふとすれば、各學派に屬する諸子を學派の中に解消せしめ、その各々の思想を學派のそれに統合して眺めるが賢明とせられるかも知れぬ。然し既に述べたように先秦諸子を流派に分つはもと便宜に出でたるに過ぎず、學派あつての諸子ではなく諸子あつての學派である。故に諸子を學派に解消するかどうかと思ふ。又吾々は思想を存在が思想家の個性を通じて發現するものと解する。故に諸子を學派に解消せしめるはとらざるところでなければならぬ。さらに吾々は思想をば流轉の相に於て捉へその生成變遷を觀ぜんとする。そしてその爲には各學派に屬する諸子の思想の繼起のあとをたづねるを要する。それで各學派に屬する諸子をその學派の中に解消せしめぬとすれば、諸子の餘りに多く、しかもそれほど重要なものゝ少なからざるの嘆を生ずる。故に各學派の諸子に就いてその代表的な重要なものに限ることとなる。

そこで結局次の如くなる。即ち先づ既にふれたように先秦經濟思想史の方法は先秦經濟思想の究明である點に於てそれは時代的研究方法であるが、さてその先秦經濟思想の究明に於ては學派的研究方法をとるべきであり、そしてその學派は、儒道墨法の四家を選び、その各に於いてはその中核を形成する諸子の論著に就いて經濟思想を探求、發掘、精鍊、體系化し、それを環境が思想家の個性を通じて發現するものとして理解するとともに、これを流轉の相に於て捉へ、その生成變遷を觀じ、しかもそれを支那經濟思想史の立場から爲すを要する。そしてそれらの諸要請を充足する時そこに先秦經濟思想史は成り立つ。私はそう考へる。